

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊27年目

創刊1989年 Nr. 307

2015年1月号



Diego Velázquez (1599-1660) Infantina Margarita (1651-1673) im weißen Kleid um 1656 Öl auf Leinwand, beschnitten: 105 cm x 88 cm

ウィーン美術史博物館 特別展『ベラスケス』 2月15日まで開催

© Wien, Kunsthistorisches Museum



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 40



我が国産官学の協力により、一昨年の十二月からベトナム原子力界のリーダを担う人材の育成、自ら研究や設計ができる自立した研究者・技術者の育成を目的とした日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムを開催している。昨年十一月二七―二十八日には第三回フォーラムがある原子力研究所で開催された。

同研究所に新研究炉の導入計画があることから、研究炉の設計・建設・運転経験、及び研究炉材育成に係る情報交換を行うとともに、意見交換を通じた日本・ベトナム間のコミュニケーションを確立することがねらいである。我が国からは、日立東芝、三菱、国際原子力開発、原子力国際協力センター、原子力機構、原安協、東工大、長岡技術大、近大、京大から三十名、ベトナムからは原子力研究所を中心に中島教授と筆者が参加した。京大からは四名教授と筆者が参加した。フォーラムでは計二十八件の発表とパネル討論があり、「ベトナム及び日本の原子力研究開発における研究炉の重要性」と題するパネル討論では、筆者は「レジリエンス能力の向上のための研究炉を用いた人材育成の重要性」と題する報告をした。福島原子力発電所事故で得られた重要な教訓の一つが、想定外事象に起



フォーラム参加者

因するシビアアクシデントに対応すべくレジリエンス能力の向上であり、そのためには研究炉を活用した実地体験が必須であると訴えた。発表に対して全体に活発な討論があった。個人的には、この九月に博士号を取得したダラット原子力研究所から京大への元留学生に再会したこと、閉会の挨拶でこのことに触れたら会場から大きな拍手が沸き起こったことなどが嬉しかった。その後、原子力研究所を初めて見学し、美しいダラット市内も観ることができ有意義だった。

研究所を初めて見学し、美しいダラット市内も観ることができ有意義だった。さて、今日のウィーンと京都の対比では、両市を代表する大学について述べたい。リングに面するウィーン大学は、二六五五年創立のドイツ語圏では最古の大学である。約八万八千人の学生約九千四百人の教職員を擁するオーストリア最大の教育・研究機関である。物理学のシュレーディンガー、動物行動学のローレンツ、経済学のハイエクを始め、国内随一の十名のノーベル賞受賞者を輩出している。他にも物理学のボルツマンやマイタナー、数学のゲーデル、遺伝学のメンデル、精神分析学のプロイト、面白いところでは、作曲家のブルックナーとその講義を聴いたマーラーが以降親交を深めたという。このように、ウィーン大学出身や教鞭を取った著名人は枚挙にいとまがない。

一方、一八九七年創立と我が国で二番目に古い京都大学は、自由の学風を建学の精神とし、現在、約二万三千人の学生、約五千四百人の教職員を擁する。学部・研究科以外に十四の研究科、十七の研究センターを設置しており、我が国の大学では最多である。昨年の赤崎教授や二〇二二年の中山教授ら九名のノーベル賞受賞者を輩出し、数々でも広中教授、森教授と二名のフィールズ賞受賞者を輩出し、ラスカー賞、ガードナー国際賞の受賞者数でも我が国の大学では最多を誇る。その他、小説家の菊池寛や小松左京、政治家の池田勇人や李登輝、登山家の西堀栄三郎、哲学者の梅原猛など、国内外に大きな影響を与える人物を輩出している。点がウィーン大学と共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中ウィーン大学でシュレーディンガーを始めとする歴代著名教授の彫像を拜見した。京都大学では学生として六年間過ごし、ここ三年半は教師として奉職している。両市の代表大学に接することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン大学を描いたスケッチを掲載させていたたく。

(訂正) 先月号で「扶余は同じく百濟の都」と訂正させていただきま

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

